

ハバクク書2章2-4節 「義人は信仰によって」

1A 暴力的な出来事

2A さらなる暴虐による裁き

3A 信仰による義

1B 見張り 1

2B 定めの時 2-3

3B 神の真実への応答 4

本文

ハバクク書 2 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、前回でナホム書を終えました。今日は午後に、ハバクク書を 1 章から 3 章まですべて読みます。今朝は、2 章 2-4 節に注目したいと思います。(新改訳の第三版を読みます。)
「2 主は私に答えて言われた。幻を板の上を書いて確認せよ。これを読む者が急使として走るために。3 この幻は、定めの時について証言しており、終わりについて告げ、まやかしを言ってはいない。もしおそくなくても、それを待て。それは必ず来る。遅れることはない。」
4 見よ。彼はうぬぼれていて、まっすぐではない。しかし、正しい人はその信仰(真実)によって生きる。」

私たちは、4 節の言葉、「正しい人はその信仰によって生きる。」という言葉をよく知っています。これは、新約聖書の三箇所において引用されているからです。一つはローマ人への手紙 1 章 17 節です、「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる。」と書いてあるとおりです。」そしてパウロは、律法の行ないによらず、信仰によって神の前に義とみなされるのだということを話しています。神の前に「義とみなされる」ということが、ローマ人への手紙で大きく取り上げられている課題でした。どうやって、神の怒りから救われるのか？聖なる正しい神の前で、どのように自分が認められるのか？それは、律法の行ないではなく、罪の供え物となってくださったキリストご自身を受け入れること、この方を身につけることなのだ、ということです。

もう一つは、ガラテヤ書 3 章 11 節です。「ところが、律法によって神の前に義と認められる者が、だれもないということは明らかです。「義人は信仰によって生きる。」のだからです。」ガラテヤ書においては、「生きる」ことが強調されていました。信仰によって始まったのだから、信仰によって、御霊に導かれて進むのではないか、という問いかけです。自分たちがキリストにただ信頼して生きて行こう、そして御霊が働かれるのを待とうということではなく、自分たちで神の国を成し遂げようというような動きをするならば、ガラテヤの教会と同じ過ちを犯します。ですから、ただイエス様に信頼して生きていく、という生き方がガラテヤ書の中身です。

そしてもう一つは、ヘブル書 10 章 37-38 節です。「もししばらくすれば、来るべき方が来られる。おそくなることはない。わたしの義人は信仰によって生きる。もし、恐れ退くなら、わたしのころは彼を喜ばない。」ここでは、「信仰」について取り扱っています。信じるというのは何なのか？それは、キリストが何にもまして優れた方であることを知って、この方に期待をかけることなのだとということが強調されています。ヘブル人、ユダヤ人の信者たちは、ユダヤ教で大事にされているもの、モーセや祭司制度、いけにえの制度などに囲まれていました。その中に埋没して、生きて行けばよいのか？ということです。これは私たち日本人にも共通しています。キリストが、他の神道や仏教と同列に、同じようにして信じ、受け入れれば、迫害や困難、反発から免れることができるでしょう。しかし、キリストが第一、この方があらゆる名にまさる名が与えられていると信じているから、だから苦しくなります。けれども、キリストは事実、あらゆるものよりも、どんなに良いと思われているものよりも優れていることを信じて、それで生きるのです。

ですから、ローマ書、ガラテヤ書、そしてヘブル書それぞれのハバククの預言が引用されていますが、それぞれに強調点があって引用されています。今朝は、実際にこの言葉を主が与えられた、背景を見て行きたいと思います。「信じる」というと、どうしても私たち日本人には、しっかりと来ない言葉です。「いわしの頭も信心から」と言われるように、「そんなこと言われたって、分かりません。」という気持ちになるでしょう。けれども、自分の生活に、到底理解ができない出来事、衝撃的なこと、あるいは不条理、曲がったこと、そして耐えられないような悲しいこと、自分の理解をはるかに超えてしまっていることが起こって、当惑する、戸惑うことはあるかと思えます。それでも、神は事を進ませておられる、全ては神の手の中にあると信じなさいと言われたらどうでしょうか？神がおられると言われても、「いや、おられないでしょう。」と普通なら感じるようなところに、実は、そこに神がおられるのだと言われたらどうでしょうか？それを受け入れ、神に応答するということが信じるということなのだ、と言われたらどうでしょうか？そうです、これがハバクク書で使われている意味です。

1A 暴力的な出来事

時は、南ユダの最後の王たちの時代であると考えられます。宗教改革を断行したヨシヤが、エジプトのパロ、ネコと戦って夭折した後に、ユダの王たちはエホアハズ、エホヤキム、エホヤキン、そしてゼデキヤと目まぐるしく変わりました。世界情勢は、前回ナホムの預言で読みましたように、アッシリヤがバビロンによって滅びました。メソポタミアには、代わりにバビロンが拡張し、イスラエルやその周辺の国々もバビロンの影響下に置かれました。南にあるエジプトが覇権を及ぼしていたのですが、それが一気にバビロンがエジプトの国境のところまで影響力を及ぼすようになったのです。それで、これらユダの王は、バビロンとエジプトを天秤にかけるような姑息なことを行っていました。そしてエルサレムでは、バビロンの側につくのか、エジプトの側につくのかで、国論が分かれていました。しかし主は、そこに焦点を当てておられませんでした。彼ら自身の心が、神から離れていたことを、預言者を通して咎めていました。主が叱責されたように、下にいる者たち、その国民、弱者に王たちは目を留めていなかったのです。

先週、衆院選が終わりましたが、私たちは政治家や国のことを批判することは簡単に行ないませんが、では自分自身のことについてはどうなのか、については問わないでしょう。批判そのものは悪いことではないですが、自分の周りのことを批評し、批判している中で、いつの間にか自分が世界の中心になっています。自分の感覚や判断こそが正しいのだという前提を持って生きてしまうのです。そうしているうちに、神が自分たちの理解を超えて働いておられるという想像ができなくなり、不信仰に陥っており、高ぶりの罪を犯しています。ユダの王たちや、エルサレムの住民はそのような状態でありました。バビロンに付くか、エジプトに付くかと国論は別れていたのですが、すぐそばにいる人々を救い、助けるということはず、神を自分たちから退けていました。彼らは、強者であるバビロンにはへつらいますが、弱者は虐げていたのです。

それが、ハバクク書の始まりです。1章1-4節にあります。ハバククは、ユダの国に、エルサレムの都の中に暴虐を見ました。物理的にも、経済的にも、司法においても、道徳的にも、暴力的な出来事が起こっていました。それで、暴虐があります！と主に叫んでいるのですが、答えがないように感じます。なぜ、あなたは救ってくださらないのですか、と叫びます。かつ、主のことばがないがしろにされています。ユダの民は、神の教え、トーラがあるからこそ生きることができると言われた民族です。それが主のことばが横に追いやられているのです。それで、暴力が横行しています。争いが起こっています、競争や闘争が起こっています。

2A さらなる暴虐による裁き

すると、神が答えてくださいました。それが1章5節から11節です。主は、「わたしは、確かに動いている。」と言われます。私たちは、祈りや願いがすぐに聞かれないと、聞かれていないと感じますが、しかし、そのような最中にも、主は確実に働かれています。5節に、「わたしは一つのことをあなたがたの時代にする。」と言われます。ところが、主は、「それが告げられても、あなたがたは信じまい。」とも言われるのです。全く、理解を超えたことを行なっているということです。それは何か？暴虐を犯しているユダに対して、主は、はるかにさらに横暴なバビロンを裁きの器として用いられるということです。ユダが暴虐を行なっていることに対して、主が何とかしてくださる、正しく裁いてくださることは願っていましたが、ユダよりもさらに悪い、次元を超えて悪いことをしているバビロンを、正しい裁きの器として神が用いられるということです。

このことにハバククは、確かに驚きました。信じられませんでした。「では、バビロンのその行なっている悪を、あなたは聖い方だから、聖すぎてみるにおできにならないのですか？と問いかけています。あまりにも良い生活をしている人、例えば王家に住んでいる人が、人々の間で起こっている悪について、ぴんと来ていないという意味です。まして神は正しく、聖なる方だから、バビロンの悪に目を留めるにおできにならないのですか？と問いかけています。例えば、一人の人を殺してしまった人がいるとします。裁判所で死刑判決が下りました。死刑執行の時が来ました。東京であれば、東京拘置所でしょうか、死刑を執行する場所があります。けれども、これまで何十人、

いや数百人単位で人を殺してきた暴力団に、殺してもらいます。こんなに正義ではないではないですか！ということになりますね。しかし、私たちは現実にこのようなことを見ます。悪があっても、もっと悪を行なっている人々がいる。悪をもって悪が裁かれるということです。そして、そのもっと悪い方は野ざらしにされているように見える。

私たちは、心の中で訴え、叫びが起こります。私たちの生活に、半ば暴力的に何か押し寄せてくることです。ある人たちにとっては、自然災害かもしれません。ある人にとっては、会社における出来事かもしれないでしょう。こうであるべきなのに、この人たちを信じていたのに、なんでこんな変貌してしまうのですか？など。自分が大切にしていたもの、価値観が、半ば暴力的に奪い取られていくような出来事があります。しかも、そのことが解決されるようには一向に見えず、むしろその反対の方向に物事が進んでいる場合があります。心の中では、一種の虐げを受けています。その時に、主はどこにおられるのでしょうか！と叫びたくなるかもしれません。いや、そのような叫びがなく黙しているなら、それは自分に正直ではないし、神に対しても正直ではないでしょう。信仰生活というのは、疑問のない生活ではありません。疑わしいことが起こっても、それでもなおのこと主がおられることを信じて、平安が与えられるのが真実な信仰です。

不思議なことに、ハバククのような状況の中にいる人のほうが、強い信仰を持っています。神がおられないように見える状況に置かれている人のほうが、なおのこと神がこんなにも鮮やかにおられるのだということを信じています。そして信仰によって、実際にそれが見えるのです。暴力的なことが起こって、それで真実な生き方を見いだした方で、横田早紀江さんがいますね。娘さんの、めぐみさんが13歳の時に拉致されました。その後、知り合いの方から聖書を渡され、ヨブ記を読んでもくださいと言われ、そこに書かれているヨブの受けた理不尽な苦しみを見ました。しかし、ヨブは最後に主の前で悔い改め、主は彼に良くしてくださいました。横田早紀江さんは、それでイエス様を自分の救い主、主として受け入れ、洗礼も受けました。こんな状況であれば、信仰は持たないと思われる時が、いやむしろ信仰が発揮されて、試練の中にあっても喜び叫ぶことができる強さを持つのです。このハバクク書の最後で、ハバククが最悪な状況の中で、主にあって喜び勇んでいる姿を見ます。

3A 信仰による義

1B 見張り 1

ハバククは、主にこのように訴えてから、2章1節「私は、見張り所に立ち、とりでにしかと立って見張り、主が私に何を語り、私の訴えに何と答えるかを見よう。」と言いました。自分が訴えただけではなく、訴えたのは主の声を聞くことができたためでした。主と対話していたのです。多くの人が、真実な訴えをしません。訴える前に、既に自分で決め込んであきらめてしまうことが多々あります。また、訴えても、耳を傾けようとしません。被害者意識を強くして、自意識の中にいますと、そこでは神の声を聞くことに妨げになるのです。問題だけを見て、もっと大きな視野を持つことができなく

なります。しかしハバククは、正直に自分の思いをぶつけました。けれども、主が答えてくださる、聞いてくださっていると信じて、その答えを待っていたのです。

2B 定めの時 2-3

そして主が答えてくださいました。「2 主は私に答えて言われた。幻を板の上を書いて確認せよ。これを読む者が急使として走るために。3 この幻は、定めの時について証言しており、終わりについて告げ、まやかしを言ってはいない。もしおそくなっても、それを待て。それは必ず来る。遅れることはない。」

主が、「定めの時について証言して」といわれます。主は、私たちによっては全く何もしておられないと感じる時に、神ご自身の定めで、何かをしておられるのです。そして主が定められた時、その日に、主は事を行われるのです。ここに、「終わりについて」とあります。これは、バビロンが倒れる、裁かれることのみならず、世の終わりのことを指しています。終わりというと、私たちは「すべてが破壊され、破滅するのだ」という意味合いで聞きます。しかし、キリスト教の終末観、終わりの日の見方はまるで違います。「すべて、完成するのだ」という見方です。主が終わりの時に、ご自分がお考えになっていることを、全て成し遂げ、行なわれるということでもあります。そして主はここで、まやかしを言わない、だからこれを板の上を書いて確認しなさいとまで言われています。希望的観測のようなものではなく、確かなもの、確証のあるものとして受け入れなさいということなのです。

ですから、次に大事なものは、「もしおそくなっても、それを待て。」であります。矛盾するように聞こえますが、遅くなっても待てと言われながら、遅れることはないと言われます。これは、遅くなっているように私たち人間が感じて、実は神にはお考えがあって、その定めの時により必ず事を行なわれるということです。私たちには、気の遠くなるような話を神は語られます。実にペテロ第二 3 章には、「主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。(3:8)」とありますから、私たちにとっては二千年経っていても、主にとっては二日ぐらいにしかみなしておられないし、あるいは、たった一日の出来事を千年のようにみなす、つまりそれだけの永続性、永遠性を持たせる出来事であったりします。キリストが十字架に付けられた出来事を、何億人というキリスト者が世界中で、まるで昨日起こった出来事であるかのように思い出して、偲びます。なぜか、あの一日は永遠の重みがあるからです。ですから千年は一日のようでもあります。

そのようなことなので、主は待ちなさいと言われます。信じるとは、待つことです。次の 4 節に出きますが、主が必ずそうしてくださる、また今もそのことのために準備をしておられると信じるのです。ですから、待つということが信じることです。そして、あきらめないことです。

3B 神の真実への応答 4

そして、初めに読みました四節が来ます。「見よ。彼はうぬぼれていて、まっすぐではない。しか

し、正しい人はその信仰(真実)によって生きる。」ここの「彼」とは、バビロンのことです。また、ユダの中で、うぬぼれ、高ぶっている者たちのことも含まれるでしょう。自分たちで何とかできると彼らは考えていました。主の前にへりくだり、心砕かれ、主に叫び求めるのではなく、自分で何とかやっていくと思っている人々です。そういった人々は曲がっていると主は言われます。ヘブル語では、正しいという言葉ツェデクは、「真っ直ぐ」ということです。真っ直ぐに生きるには、どうしたらよいのか？それが、その信仰、あるいは真実によって生きる、ということです。

ここのヘブル語「エムーナ」は、堅いとか、確かであるとかというのが元々の意味です。そして真実を表すエメットと同じところから来ています。ここでは、神が確かにおられて、神が必ず真実を尽くしてくださると受け入れ、そこに留まることを話しています。ですから、ここの「信仰」というのは、「真実」とも言い換えることができ、神の真実によって生きることも、また人が神の真実を信じ、受け入れて生きるとも言えるのです。何も無い時に、信じがたい時に、それでも主がこのことを行なわれているのだと信じるのです。それが、真っ直ぐに生きることであり、神に喜ばれることであります。

この後に、主はバビロンの暴虐に対して、徹底的に裁きを行なわれる幻をお見せになります。ですから、バビロンがユダを暴虐によって倒すのですが、その暴虐は、後にバビロンがメディア・ペルシヤによって滅ぼされることによって報いを受けます。主は、余裕のある方です。詩篇 2 篇を見ますと、国々がご自身とキリストに立ち向かってきても、天からあざ笑っているという余裕を見せておられる方です。ユダをご自身に立ち直らせるために、バビロンに悪さえ用いられるのですが、それは彼らにとって懲らしめとして働き、それで立ち直ることができるようになります。しかし、主はバビロンを滅ぼすことには容赦がなく、彼らをご自分の思うままに用いられていただけなのです。そして、彼らをほおっておくのではなく、完膚なきまでに報いてくださるのです。

それでハバククは、最後にとんでもない行動に出ます。3 章 18 節です、「私は主にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう。」ユダはますます、状況が悪くなっています。実に、バビロンが攻め始めて、作物も取れず、家畜も餓死しはじめています。それなのに、ハバククは、主がユダを裁く器としてバビロンを用いられた後、その暴虐に対してバビロンを裁くという幻を見ていて、それで主にあって喜び勇んだのです。これは、飛び上がって踊っているという意味です。状況が悪ければ悪い程、主が何かをしておられるのではないか？という期待です。私たちは、そのような信仰の賜物、御霊からの喜びを得ましょう。そして主が再臨されるのは、まさにそのような信仰です。状況が悪くなるにしたがって、悪がはびこるのを見ればそれだけ、主が来られることが近いことを知り、希望に満たされるのです。